年・頭・所・感

『月』に想う

大熊　正信(おおくま　まさのぶ)
技術士(建設／総合技術監理部門)

公益社団法人日本技術士会
北海道本部
本部長

晴れた冬の夜空に、月が冴え冴えと見える季節となった。気温が低くなったせいだろうか。月には昔から色々な名前が付けられていて、十五夜を満月と言うのは知っての通りだが、十六夜を「いざよい」と呼んだり、上弦の月、おぼろ月など、月の満ち欠けや月齢で付けられた風流な呼び名が残っている。

海外でも、12 月はコールドムーン、これは寒くなってきた季節を表すもので、1 月のウルフムーンは餌も取れず空腹で遠吠えする狼に例えている。2 月のスノームーンは雪で狩猟が困難なことを意味し、狩猟民族らしいネーミングだ。3 月のワームムーンは日本の啓蟄(3 月上旬)の時期と重なる。

このように世界中で月を見上げて色々な事に例えたり、想像したり、考えたりしていたのが伺える。

今年は卯(うさぎ)年。うさぎは月にもいて、餅をついていると教えられた。その由来は少し寂しい話なので、ここでは割愛するが、月の表面の黒い部分(平地)と白い部分(山地)のコントラストでそのように見えるのだそうだ。見えるかどうかは個人差があろうが、そんな風に想像できる風流さは、今の世の中にどれほど残っているだろうか。

風流といえば「花鳥風月」という言葉がある。これは室町時代から伝わる言い回しで、現代でも風流の代名詞のように使われている。「雪月花」はさらに古く、万葉集にも登場する言葉だそうだが、どちらにも登場する「月」を見てこのようなことを想い浮かべる時間が、最近では随分少なくなり、心の余裕が無くなったような気がするのは残念に思う。

昨年 11 月に、アポロ計画以来、約半世紀ぶりとなる月周回軌道から無人衛星が帰還した。

1969 年に人類初の月面着陸を成功させたニュースは、胸躍る思いで聞いていて、アームストロング船長が放った言葉は、今でも鮮明に覚えている。それから 50 年以上が過ぎ、昨年 12 月に打ち上げられた衛星が、初の民間企業衛星として今年 4 月に月面に着陸する計画もあるが、これには我が国の新興企業が深く関わっている。ここの 40 代社長は、子供のころに観た映画「スターウォーズ」をきっかけに宇宙に興味を持ったとのことで、夢の実現には柔軟な発想と強烈な意欲があったものと思う。

こう考えると、月はもう見上げるだけのものではなくなってきたのか。

ロケット技術は、多方面の最先端技術の集約系である。まさに、あらゆる分野が複合した技術のイノベーションの代表格と言えるのではないだろうか。機械や電気電子はもちろん、化学、流体、応用理学、材料、構造、土質‥‥数え上げればきりがないほどの複合技術の結晶である。

我が国は今、第 6 期科学技術・イノベーション基本計画に基づいた社会づくりを進めている。従来、人文・社会科学と科学技術は直接的には繋がってこなかったが、この計画ではこれらを含めた「総合知」の活用が求められており、卓越した優れた技術であっても、単一では目標達成の一つの要素に過ぎないということを言っている。

私たち日本技術士会も、21 の専門部門を有しているが、今後はこれらの部門単独の技術ではなく、横断的な視点を持つ活動が必要となる。その結果として、国が目指す持続可能な強靭な社会へ変革していくことを、古に倣って月に願掛けしておきたい。